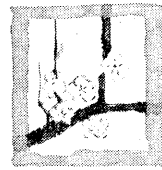


文化の中の教育 (一)

「教、え、よ、う・教、え、ら、れ、よ、う」と「学、ば、う」ということ



原 ひろ子

1 はじめに

文化人類学という分野では現実の社会に入りこんで実地調査を行なって得られる資料が学問の基礎になっています。

本稿では、私の限られた調査体験の中から、教育の問題について考えた事を書いてみたいと思います。

まず、調査に入るときは、対象となる社会において「その文化について教えていただく、その社会に住んでいるひとりひとりの人の生き方について教えていただく」という気持ちになるといふ事が必要だと、私は信じています。日本の都市・農漁村や、米国の中流社会、フィラデルフィアのカルムック・モンゴルなどの調査をしているときには、この態度が、インフォーマント(調査者に情報を提供して

下さる人)のかたがたにも通じて、いつしか積極的に「教、え、よ、う」という態度で私に接して下さる人びとが多くなってくるのが常でした。そして、こうなった時点で、私は、「これで調査は軌道に乗ったのだぞ!!」と喜び、張り切るのでした。

こういう状況のもとで、私は、「教、え、よ、う・教、え、ら、れ、よ、う」とする意識的行動は、人類にとって普遍的なものであろうと考えるようになっていました。ヒトが未成熟のままて出生し、その後の体験の蓄積によって、やっと成人するという生物として与えられた条件が「教、え、よ、う・教、え、ら、れ、よ、う」とする意識的行動を、人類に普遍的な現象とする基盤となっていないのかという説明も私には納得のいくものでした。

ですから、調査にあたっては、調査をする私の方に「教えられよう」とする意欲と態度があれば、「教えよう」とする行動をインフォーマントの方から引き出せるのは当然だという気持ちでした。そして子どもが海綿のように自分の生まれた文化の中の事象を吸収することく、私も、調査対象となった社会のもつ文化を吸収したいと思いました。

さらに、研究のテーマとして、「特定の社会において、文化が世代を超えて、伝達される過程はどのようなものか?」とか、「個人が環境としての文化をどのように自分の中にくみ込んでいくのか?」というような問題を念頭におきながら調査を進めていた私は、その研究の一環として、大人や子どもとの区別なく、「○○をあなたはどのようにしておぼえたのですか? それを誰に習ったのですか?」といった質問をする事にしていました。この質問の中の○○には、職業上の技術や日常生活の習慣から「生き方」など抽象的なものまで、いろいろな事象があてはまります。そして、日本、米國中流社会、カルチック・モンゴルのインフォーマントからは、その問いに対する、かなりくわしい回答が得られるのが普通でした。こういう回答の集積それ自体がその社会における個人の学習の過程の全貌を、伝えてくれ

るとは考えられません。観察や実験的なテストなどを用いて、インフォーマント自身の口から出た回答のもつゆがみやずれを確認しなければなりません。しかしこれらの回答は、少なくとも、個人が「私は○○を(誰々に)どのようにして習った」と意識しているかを示してくれます。人びとはこの意識を、たびたび自分の心の中で再確認したり、人との会話のさいに表現したり、ときには教えてくれた人に対して生ずる社会的義務を遂行したり、さらには、自分が人に教えるときに、教えられた事を反すうしたりしているのです。もちろん各個人が、自分のする事のすべてに關して「○○を(誰々に)どういうふうにして習った」という事を意識的に把握しているわけではなく、そこには無意識の選択は、本人にとって大事だと感じられている事、および、その社会において大事だとされている事などを中心に行なわれるようです。

次に、これらの社会では、たいいていの人が「私は、誰々に○○を教えた」という体験を意識しています。しかし、「○○をどのようにして教えたか」という事を意識的に説明できる人は減ります。そして、「○○をこのように教えてみたらAという現象がおこり、あのよう教えてみたらB

の現象がおこった」というような事まで説明してくれる人はより少なくなつてしまいます。さらにより少なくなるとはいえ、日本人や米国人の中には、泳ぎ方の教え方（つまり水泳指導法の教育）など、「〇〇の教え方の教え方」を云云する専門家や非専門家が出てきます。

いずれにせよ、日本や、米国などでは、「人が人から教えられる」という事と、「人が人に教える」という事が可能だ（すべての物事に関してではないにせよ、ある種の事ないしは多くの事に関して可能だ）と考えられ、かつ、必要であると思はれているのです。何について教えられるかという点や、どのようにして教えられるか、教えるのかという事については、日本文化、米国文化などにより文化差があるのですけれど……。

こういった具合に、私は、「教えよう・教えられよう」とする意識的行動は、人類に普遍のもの——つまり、どんな人間社会にも存在するものだと考えていました。ところが、これからお話しするヘヤー・インディアンの人びととつき合つてみて、この考えを修正するにいたりました。そして、「学ぼう」とする意識的行動は人類に普遍的といえるが、「教えよう・教えられよう」とする行動は、絶対普遍のもの

のではないと考えるようになってきたのです。さらに、現代の日本を見るとき、「教えよう・教えられよう」という意識的行動が氾濫しすぎていて、成長する子どもや、私たち大人の「学ぼう」とする態度までが抑えつけられている傾向があるのではないかしらという疑いをもつようになりました。しかし、現代のような分業のすすんだ技術社会である日本において、私たちの生活から「教えよう・教えられよう」という意識的行動を除いてしまったら、途端に日本文化は崩壊してしまうでしょう。けれども、同時に「学ぼう」という態度が阻害されていった場合、どういふことになるでしょうか。

こういふ問題をおきながら、しばらく日本を離れて、私のヘヤー・インディアン調査の体験を書いてみたいと思ひます。

2 「教える」人のない文化

ヘヤー・インディアンは、カナダ北西部のマッケンジー河と北極圏線が交差する地域に住む、狩猟・漁撈・採集民です。この人たちと十一カ月のあいだ生活を共にしているうちに、私は、ほんとうに驚いてしまいました。

猶は父親から息子へ、皮なめしは母親から娘へ、靈力のもち方については強いシャーマンから若い男女へ、英語の会話は英語の上手な者から英語を知らない者へと教えていくのだろうかというのが私の初期の推測でした。

驚きは、一九六一年夏の三カ月にわたる予備調査のときから始まりました。総人口三百五十人ほどのヘヤー・インディアンのうち、若者たちの中には英語を話す人もいます。

彼らに、「英語は誰にならったの？」と聞くと、「自分でおぼえた」という答えしか返って来ません。「どういうふうにしておぼえたの？」と聞くと、「そりゃあ、しゃべってみるのさ」ということです。ムース（アメリカおおじか）を射止めて来た男に、「ムースをどうやって射とめるかを教えてくれた人は誰なの？」と聞くと、「え？ 自分で上手になったのさ。初めてムースを射止めたのは十五歳のときだったよ」といった具合です。ムースの皮をなめしているおぼさんに「このなめし方をどういうふうにしておぼえたの？」と聞いてみると、またしても「自分でおぼえたんじやよ」という答えです。そして、誰も彼も、「なんて馬鹿なことを聞くんだろう」といった調子の答え方なのです。

私は、「こういう答え方は、今まで聞いてみたインフォ

ーマントの個人的な性格からくるもののかしら、ちん入者のような見なれぬ私に、好奇心をもって接触してくるのは、ヘヤー社会の変り者かもしれない。もっといろんな人に聞いてみなければ」と考えました。そして、一九六二年六月から六三年一月にかけての本調査のときにも、この質問を一つつけてみました。英語で聞くとときには、

“From whom did you learn how to……?”
とか “Who taught you how to……?”

とかいう表現を使うわけですが、この質問はヘヤー語には翻訳不可能だということがわかって来ました。「だれだれから習う」、「だれだれから教えてもらう」という表現がヘヤー語に見つからないのですから、ヘヤー語で聞くとときには「どのようにして○○をおぼえたのですか、」とか、「どのようにして○○ができるようになったのですか?」というような表現を用いなければなりません。しかも、それはたいへん無理なヘヤー語の構文となってしまう。そして、インフォーマントから返ってくる答えは、あい変わらず、「自分でおぼえた (I have learned by myself)」の一点張りなのです。

大人の使うおのを上手にふりおろしながら、丸太をこま

かいたきぎ用に割っている五歳の子どもにむかつて、「どうやってそれをおぼえたの?」ときくと、彼女は「自分でやっているのよ」と答えました。私のへんなヘヤー語が通じなかったのかもしれないと思って、そのあたりにいる兄や姉や年上のいところたちに「だれがおのの使い方をあの子に見せたの?」と聞いてみると、「あの子が一人で遊んでるんだよ」と答えられてしまいました。

こういう質問をくり返すと同時に、彼らの生活をつぶさに観察していますと次のようなことがわかってきました。ヘヤー・インディアン文化には、「教えてあげる」、「教えてもらう」、「だれだれから習う」、「だれだれから教わる」というような概念の体系がなく、各個人の主観からすれば、「自分で観察し、やってみて、自分で修正する」ことによつて「〇〇をおぼえる」のです。

自分のまわりにいる大人や友人やいとこきょうだいたちの猟のしかた、皮のなめし方、火のつけ方、まきの割り方、カヌーの作り方、笑い方などをじっくり観察しているのです。男の子は、獲物を射止めて帰った猟師が微に入り細にわたって語る狩の自慢ばなしに食い入るように聞きほれます。また、自分が下手な射止め方をしたら何がおかしいか

という点が、噂となって自分の耳もとにとどいて来ます。女が皮をなめしているとき、それをながめている人たちは、「液には何を入れたの?」といった質問もしますし、「肩の部分は固いねえ」といったようなコメントも発します。しかし、批評する側は、それによつて当人に注意を与えているわけではなく、当人も「ではどうすればいいのですか?」などと聞き返したりはしません。批評する側は、「それを当人がどう受けとめるだろうか、私の批評が当人の次の猟や皮なめしの作品にどう反映するだろうか」などという関心を持っていません。ただし、批評や噂を聞いている猟や皮なめしの当事者は、それによつて、自分のやり方に修正を加えたり、新しい工夫を試みたりしていくのです。

もちろん、私が外から眺めたとき特定の個人(X)のくせや、やり方が当人(Y)に強い影響力をもって伝えられていることもあり得ます。しかし、XもYも、そのことを意識していないのが普通で、二人とも、「Yが自分でおぼえた」と思っているのです。こういう社会では、「誰かに教える」ということすら考えられないことなのです。——つづく——

(文化人類学)